

蘇軾詩注解（二十二）

山本和義
蔡毅
中裕史
中純子
原直枝
西岡淳

（南山読蘇会）

中国宋代の詩人蘇軾の以下の作品について注解を施す。括弧内の数字は東北大学中国文学研究室作成『蘇東坡詩作品表』による通し番号。

范淳父に次韻して秦少章を送る（一八八三）

林夫が当に靈隱寺の寓居に徙るべしと聞きて、戯れに「靈隱の前一首」を作る（一八八四）

滕達道が挽詞 二首（一八八五・一八八六）

蘇伯固が蜀岡に遊んで李孝博が使を嶺表に奉ずるを送るに次韻す（一八八七）

石塔寺 并びに引 (一八八九)

晁美叔發運右司年兄が闕に赴くを送る (一八九〇)

王文玉が挽詞 (一八九一)

芝上人が廬山に遊ぶを送る (一八九三)

一八八三 (施三十一一三)

次韻范淳父送秦少章

范淳父に次韻して秦少章を送る

- 1 宿縁在江海 宿縁 江海に在り
- 2 世網如予何 世網 予を如何せん
- 3 西來庾公塵 西來 庾公の塵
- 4 已濯長淮波 已に長淮の波に濯う
- 5 十年淮海人 十年 淮海の人
- 6 初見一麥禾 初めて一麥禾を見る
- 7 但欣爭訟少 但だ欣ぶ 争訟の少なるを
- 8 未覺舟車多 未だ覺えず 舟車の多きを
- 9 秦郎忽過我 秦郎 忽ち我に過り
- 10 賦詩如卷阿 詩を賦して「卷阿」の如し
- 11 句法本黃氏 句法 黃氏に本づき

- | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------------|-------------|-----------|-----------|----------|---------------|----------|--------------|-----------|----------|------------|---------|---------------|---------|---------------|-----------|----------|
| 28 | 27 | 26 | 25 | 24 | 23 | 22 | 21 | 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12 |
| 吾將寄潛沱 | 坐籌付公等 | 烽火連朝那 | 西羌已解仇 | 妙語慰蹉跎 | 贈行苦說我 | 病鶴借一柯 | 近聞館李生 | 枯桐得雲和 | 瘦馬識驟耳 | 獨肯勤收羅 | 小范真可人 | 欲薦空悲歌 | 後生多名士 | 逝將老西河 | 嗟我久離羣 | 二豪與揩磨 |
| 吾れ將に潜・沱に寄せんとす | 坐ながら籌を公等に付す | 烽火 朝那に連なる | 西羌 已に仇を解き | 妙語 蹉跎を慰む | 行くに贈るに苦ろに我を説き | 病鶴 一柯を借す | 近ごろ聞く 李生を館すと | 枯桐に雲和を得たり | 瘦馬に驟耳を識り | 独り肯て勤めて收羅す | 小范は真に可人 | 薦めんと欲して空しく悲歌す | 後生 名士多し | 逝きて將に西河に老いんとす | 嗟 我れ久しく離群 | 二豪 与に揩磨す |

〔原注〕謂魯直也（魯直を謂うなり）

〔**〕 其兄少游與張文潛（其の兄少游と張文潛と）

〔**〕 李廌方叔（李廌、方叔）

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。知揚州として揚州にあった。

○范淳父 范祖禹のこと。淳父（淳甫とも表記する）はその字。「范祖禹に答う」詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊六五五頁）を参照。○秦少章 秦觀の弟で、少章はその字。元祐六年（一〇九二）の進士で、臨安の簿を務めた。蘇軾に従って学び、詩文をよくした。蘇軾に、「太息一章、秦少章秀才を送る」（『蘇軾文集』巻六四）がある。なお、范祖禹のものと詩は伝わらない。

1 ○宿縁 前生からの因縁。何承天「宗居士に答うる書」（『弘明集』巻三）に、「豈に独り愛欲の未だ除かざるのみならんや、宿縁をば是れ畏る」とある。○江海 江湖に同じく、朝廷から遠く離れた土地のことで、自由な生活をいう。「呂希道が和州に知たるを送る」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊五三頁）を参照。2 ○世網一句 世網は、世の中のしがらみ。陸機「洛に赴く道中の作 二首」その一（『文選』巻二六）に、「借問す 子 何くにか之く、世網 我が身に嬰う」とある。また、孔子が宋で桓魋に迫害を受けたとき、「天 徳を予に生せり。桓魋其れ予を如何」と言った（『史記』孔子世家、『論語』述而篇）。3 ○庾公塵 東晉の庾亮は武昌（湖北省）に在って強兵を擁し、その勢力は時の丞相の王導を圧迫した。王導は心中穏やかでなく、冶城（江蘇省）に在って西風が土埃を立てると扇でさえぎり、「元規 塵もて人を汚す」（元規は庾亮の字）といった（『晉書』王導伝）。56 ○十年・初見二句 淮海は、揚州をさす。『尚書』禹貢に、「淮海は惟れ揚州」とある。麦禾は麦と稲で、穀物の総称。『春秋左氏伝』莊公二十八年に、「大いに麦禾無し。臧孫辰 糴を齊に告ぐ」とある。二句は、揚州近辺に久しく不作が続いたが、この歳は収穫に恵まれたことをいう。8 ○未覓一句 韓智翹は、「マダシキニ商船ナンドノ来テ財ヲ売（ル）ヤウナ事ハナシ。豊年トハ云ヘドモマダ飢饉ノ余殃アルホ

ドニゾ』(『四河入海』卷二二の二)と記す。9 10○秦郎・賦詩二句『詩経』大雅(生民の什)「卷阿」詩の小序に、「召の康公 成王を戒むるなり。賢を求めて吉士を用うるを言うなり」とある。二句は、蘇軾を訪うた秦觀が、賢者の登用の必要を説いたことをいう。11○黄氏 黄庭堅のこと。原注を参照。12○二豪 秦觀の兄の秦觀と、張耒をさす。原注を参照。○揩磨 すりみがくこと。学問や人格の向上に努め、また鍛えあうことのとえ。13 14○離群・逝将二句 離群は、仲間から離れてひとりいること。孔子の弟子の子夏の故事に因む。「莘老に贈る 七絶」その一の注(『蘇東坡詩集』第二冊四三五頁)を参照。西河は、その子夏が隱退(離群索居)した地で、陝西省の黄河の西岸一帯をさす。『礼記』檀弓上に「退きて西河の上に老ゆ」とあり、鄭玄の注に「西河は、龍門より華陰に至るの地なり」とある。逝将は、いざ行こうとすること。世俗に別れを告げて自由の地に赴かんとする意を含む。「陳海州が「乗槎亭」に次韻す」詩の注(『蘇東坡詩集』第三冊四〇八頁)を参照。なお、逝を発語の助字として、「逝に」と訓ずる説もある。15○後生 若者。後輩。『論語』子罕篇に、「後生畏る可し」とある。16○悲歌 悲しみ激してうたう。ここでは、後輩たちの推挙が意のままにならず、悲しみ憤って歌う(「悲歌慷慨」意に解されよう。『史記』項羽本紀に、「是に於て、項王乃ち悲歌慷慨し、自ら詩を為りて曰く、……」)とある。17○小范一句 小范は、范祖禹のこと。その父の范百禄を大范と称するのに対していう。可人は、人柄のよい人物。徳のある人。『蘇軾詩注解(二十一)』に収める作品番号一八六〇の詩の注を参照。18○收羅 人やものをあまねく求め集めること。陳琳「袁紹の為に予州に檄す」(『文選』卷四四)に、「英雄を收羅し、瑕を棄てて用を取る」とある。19○瘦馬一句 『史記』滑稽列伝の東郭先生の伝に、「馬を相するは之を瘦せたるに失し、人を相するは之を貧しきに失す」とある。驟耳は、名馬の名。周の穆王の八駿馬の一つで、ここでは才能ある人物のたとえ。『竹書紀年』卷下「穆王」に、「(周穆王)八年春、北唐来たりて賓たり。一驪馬を献ず。是れ驟耳を生む」とある。20○枯桐一句 桐は、琴を作る材に用いられる。『詩経』邶風「定之方中」に、「之に樹うるは榛栗・椅・桐・梓・漆、爰に伐りて琴瑟とせん」とある。雲和は、良質な琴の

材を産するとされた山の名で、後に琴の異称となった。『周礼』春官宗伯「大司楽」に、「孤竹の管、雲和の琴瑟、龍門の舞」とある。以上の二句はいずれも、難しい条件の下で優れた人材を見出すことをたとえる。21○李生 李廌（二〇五九—一一〇九）のこと。字は方叔。華州（陝西省）の人。黄州において蘇軾に会い、その才能を称えられた。元祐三年、蘇軾が知貢舉の任に在った際に廌に召せられ、その後も蘇軾は廌と共にその推挙をはかったが、結局は果たせなかった。『宋史』卷四四四に伝がある。館は、食客とする意。22○病鶴一句 病鶴（病んだ鶴）は、才気ある者が元気をなくする意を含み、下第した李廌をさす。柯は、太い枝。唐の李義府が、太宗に命じられてカラスを詠じたという詩に、「上林 許の如き樹に、一枝をも借りて棲まず」とある（『唐詩紀事』卷四）。23 24○贈行・妙語二句 范祖禹が、秦觀に贈ったものと詩の中で、蘇軾に懇ろに言及することについていう。一韓智翹は、「言（フココロ）ハ、淳父 詩（ヲ）作（リテ）少章ヲ送ルゾ。其ノ詩中ニ坡ガ事ヲ説（カ）ルガ、其ノ詩語ガ妙ナリ。是ヲ見テ我が不遇ヲ慰スルゾ」と記す。蹉跎は、つまづくこと。延いて、志を得ないこと、時機を失うこと。『楚辞』九懷「株昭」に、「驥は両耳を垂れ、中坂に蹉跎す」とある。25 26○西羌・烽火二句 西羌は、西方のえびすで、西夏のこと。解仇は、仲違いをやめて団結すること。「子由が苦寒に寄せらるるに和す」詩の注（『蘇東坡詩集』第一冊五七九頁）を参照。朝那は、今の寧夏回族自治区にあった漢の県名。『史記』孝文本紀に、「十四年冬、匈奴謀りて辺に入りて寇を為し、朝那の塞を攻め、北地の都尉印を殺す」とある。27○坐籌 籌は、はかりごと。『史記』高祖本紀に、「夫れ籌を帷帳の中に運らせ、勝を千里の外に決するは、吾れ子房に如かず」とある。○公等 あなたがた。『漢書』朱買臣伝に、「公等の如きは、終に溝中に餓死せんのみ」とある。一韓智翹は、「中国ニイテ籌ヲ千里ノ外ニ運（ラ）ス事ハ、幸ニ范淳父ガイラルル程ニ、貴方ニ付シ申ス」と記す。28○潜沱 潜・沱ともに川の名で、蘇軾の故郷である蜀を流れる。『尚書』禹貢に、「華の陽・黒水は惟れ梁州、岷嶓既に芸し、沱・潜既に道る」とあり、孔安国の伝に、「沱・潜は源を此の州に発し、荊州に入る」とある。〔原注〕○魯直 黄庭堅の字。〔**〕○少游 秦觀の字。○文潜 張

未の字。〔***〕○李麿方叔 21句の注を参照。

江湖のちまたに生きるのが前世からの因縁、世のしがらみすら私をどうすることもできない。こたびは西の都からやって来て、都会のちりも淮河の波ですっかり洗い流してしまった。

揚州の人々はこの十年で初めて豊年を目にするのだとか。確かに訴訟の数が少なくなったのは喜ばしいことだが、まだ舟や車があふれるほどの豊かさが戻ってはいないようだ。

さて秦君がにわか私を訪ねて来られ、賢人の登用を説く「卷阿」の如き詩を詠じられた。句法は黄山谷どのに学ばれたもの、加えて少游・文潜の二豪が磨きをかけてくれたとなれば、出来がよいのも道理だ。

ああ、なのに私は久しく仲間たちと離れおり、世を捨ててこの地を（子夏が隠棲した）西河とみなして、ここでただ老いてゆくのだ。若者にはすぐれた人物が多いのに、推挙しようにも自分はその立場にはなく、ただ悲しみ憤ってうたうばかりだ。

その一方で、小范どののはまことに徳のあるお方、よき人材を見落とすまいと自ら努めておられる。あたかも瘦馬のなかから駿馬の驟耳を見いだし、枯れた桐を材に雲和の名琴をつくったように。

近ごろ聞いたところでは、李君（麿）をそちらの屋敷に住ませたとか、さしずめ「病んだ鶴に一枝を貸す」といったところでしょうか。旅立つ秦君に贈られた詩には、私のことを心を込めて書いてくださった、そのすばらしい言葉が私の不遇を慰めてくれます。

西のえびすどもが争いをやめて連携し、烽火がわが朝那のあたりに連なるいま、「はかりごとを帷幄のうちに運らす」大仕事は皆さんに任せて、私は潜沱の流れのほとりに身を寄せることといたします。

（担当 西岡 淳）

一八八四（施三二一四）

聞林夫當從靈隱寺寓居、戲作靈隱前一首

林夫が當に靈隱寺の寓居に從るべしと聞きて、戯れに「靈隱の前一首」を作る

- 1 靈隱前 天竺後
靈隱の前 天竺の後
- 2 兩澗春涼一靈鷲
兩澗の春涼 一靈鷲
- 3 不知水從何處來
知らず 水の何處從り來たるかを
- 4 跳波赴壑如奔雷
跳波 壑に赴いて 奔雷の如し
- 5 無情有意兩莫測
情無さか 意有るか 兩つながら測る莫し
- 6 肯向冷泉亭下相縈回
肯て冷泉亭の下に向かつて 相縈回す
- 7 我在錢塘六百日
我れ錢塘に在ること六百日
- 8 山中暫來不暖席
山中 暫く來たつて席を暖めず
- 9 今君欲作靈隱居
今 君 靈隱の居を作して
- 10 葛衣草屨隨僧疏
葛衣 草屨 僧疏に随わんと欲す
- 11 能與冷泉作主一百日
能く冷泉の与に主と作ること一百日せば
- 12 不用二十四考書中書
用いず 二十四考 中書に書するを

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○詩題を宋本・王本では「靈隱前一首贈唐林夫」につくる。○林夫 唐垌のこと。林夫はその字。かつて杭州知事であった唐詢（一〇〇五〜六四）の子。『宋史』卷三二七に伝がある。神宗のままで王安石を批判する上奏をして、広州軍資庫・

吉州酒税に左遷された。『蘇軾詩注解（九）』所収の作品番号一七三三・一七三四の注を参照。○靈隱寺 杭州を代表する名刹。東晉の咸和元年（三三六）に梵僧慧理によって創められた。蘇軾「靈隱寺に遊んで、來詩を得、復た前韻を用う」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊一二二頁）を参照。

1 ○天竺 隋代に靈隱寺から独立した天竺寺のこと。二寺は依然として山門をともししていた。白居易「韜光禪師に寄す」詩（『白居易集箋校』外集卷上）に「一山門 両山門と作り、両寺は原と一寺従り分かる」とある。2 ○兩澗 春涼 『咸淳臨安志』卷二三に「靈山の陰、北澗の陽は即ち靈隱寺なり。靈山の南、南澗の陽は即ち天竺寺なり。二澗の流水は錢源泉と号し、寺峰の南北を遶りて下り、峰の前に至りて合して一澗と為る」とある。涼は、滝のような急な流れをいう。歐陽修「廬山高し。同年劉中允の南康に帰るに贈る」詩（『歐陽文忠公文集』卷五）に「千巖万壑松檜響き、懸崖の巨石 流淙飛ぶ、水声聒聒として人耳を乱し、六月の飛雪 石砒に灑ぐ」とある。春涼は、雪解けの水を得て流量の増した流れをイメージさせる。○靈鷲 靈鷲峰のこと、飛來峰ともいう。東晉の咸和元年（三三六）に靈隱寺を創めた僧慧理が、中天竺国にある靈鷲山（釈迦說法の地）の一小峰が飛來したものと見立てて名づけた（『咸淳臨安志』卷二三）。蘇軾「八月十七日、天竺山より桂花を送る。分ちて元素に贈る」詩の注（『蘇東坡詩集』第三冊三五三頁）を参照。4 ○奔雷 激流がとどろくさま。蘇軾「又た鄭戸曹を送る」詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊六一七頁）を参照。6 ○肯 心におもうところにびびり合せてくれる。蘇軾「武道士が賀若を弾くを聴く」詩に「清風 終日自ら簾を開き、涼月 今宵 肯て檐に掛かる」とある（『蘇軾詩注解（十二）』を参照）。○冷泉亭 唐の元和十五年（八二〇）に、杭州刺史元夔によって溪流の通る池の中央（靈隱寺の西南隅）に建てられた。白居易は、杭州刺史在任中の長慶三年（八二三）、「冷泉亭の記」（『白居易集箋校』卷四三）を作り、「東南の山水、餘杭郡を最と為し、郡に就いて言えば、靈隱寺を尤（とりわけ）すぐれる」と為し、寺觀に由れば、冷泉亭を甲（第一）と為す」と、冷泉亭を杭州のなかで山水の最も美しい場所だと讃えた。翌年杭州を去るときに「天竺・靈隱の両寺に留題す」詩（『白居易集箋校』卷二三）に「誰か冷泉の水をして、我を送りて山を下り來たらしむ」と、冷泉亭をめぐる水流を愛でた。○縈回 山々をめぐってめぐり流れること。蘇軾「荊門の惠泉」詩の注（『蘇東坡詩集』第一冊一八二頁）を参照。7

○我在一句 六百日という表現は、白居易「天竺・靈隱の兩寺に留題す」詩（『白居易集箋校』卷二三）の「郡に在りて六百日、山に入ること十二回」を意識するであろう。蘇軾「予 杭を去ること十六年にして復た来たり……三絶句を作る」その三に「郡に在ること前に依りて六百日、山中 記せず 幾回か来たれる」と詠じている（『蘇軾詩注 解（十一）』の注を参照）。10○葛衣一句 葛衣は、山野に自生するくずかずらの繊維で織り上げた布衣。僧疏は、僧侶の粗末な食事をいう。蘇軾は黄州に流謫されていたときの自らの生活を、「章子厚参政に与うる書 一首」その一（『蘇軾文集』卷四九）に「僧舎に寓し、布衣・蔬食にして、僧の一餐に随う」という。ここでは唐垌が靈隱寺で生活することをいう。12○不用一句 『旧唐書』郭子儀伝に「天下は其の身を以て安・危と為す者、殆ど二十年、中書令の考二十有四を校う」とあり、郭子儀は唐王朝の玄宗・肃宗・代宗・徳宗の四代、約二十年間にわたって唐朝の軍事を統帥し、最高位を極めて、二十四回に及ぶ人事考課をする中書令であった。ここでは、郭子儀のように高位高官として政治の中樞に長くとどまることなどいらないといって、王安石に反目して左遷された唐垌を労っている。

靈隱寺の前を流れ、天竺寺の後を流れて、ふたつの春の急流がひとつとなる靈鷲峰、いったいどこからやってくるのかと思われる水が、雷が轟くような音をたてて波立ちながら谷間に向かって流れくだったいく。その水は無情なのか、こころ有つてのことかは知らないけれど、冷泉亭の下方に向かってやさしくとりまいて流れてくれる。かつてわたしは銭塘に六百日もいたけれど、山中に来ることができても、ゆっくりと過ぐすことはできなかった。

いまあなたは靈隱寺に居をかまえ、葛衣と藁沓という出で立ちで僧とともに暮らされるという。冷泉亭のあるじとなって百日も過ぐせるなら、（郭子儀のように）長く高位高官の地位にあることなど なにほどのことであろうか。

（担当 中 純子）

一八八五・一五八六（施三二一五・一六）

滕達道挽詞二首

滕達道が挽詞 二首

一八八五

その一

- | | | |
|----|--------|---|
| 1 | 先帝知公早 | 先帝 <small>せんてい</small> 公 <small>こう</small> を <small>し</small> 知 <small>る</small> こと <small>はやく</small> |
| 2 | 虚懷第一人 | 虚 <small>こころ</small> を <small>むな</small> し <small>ゆう</small> す 第一 <small>だいいち</small> 人 <small>にん</small> |
| 3 | 至今詩禮將 | 今 <small>いま</small> に <small>いた</small> る <small>まで</small> 詩 <small>し</small> ・礼 <small>れい</small> の <small>しやう</small> 將 |
| 4 | 獨數武宣臣 | 独 <small>ひとり</small> 武 <small>ぶ</small> ・宣 <small>せん</small> の <small>しん</small> 臣 <small>しん</small> を <small>かず</small> う <small>る</small> のみ |
| 5 | 材大雖難用 | 材 <small>さい</small> の <small>だい</small> なる <small>は</small> 用 <small>もち</small> い <small>ら</small> れ <small>がた</small> 難 <small>がた</small> し <small>と</small> 雖 <small>いと</small> も |
| 6 | 時來亦少信 | 時 <small>とき</small> 來 <small>き</small> た <small>れば</small> 亦 <small>また</small> 少 <small>すこ</small> しく <small>の</small> 信 <small>ぶ</small> |
| 7 | 高平風烈在 | 高平 <small>こうへい</small> 風烈 <small>ふうれつ</small> 在 <small>あ</small> り |
| 8 | 威敏典刑新* | 威敏 <small>いびん</small> 典刑 <small>てんけい</small> 新 <small>あら</small> なり |
| 9 | 空試乘邊策 | 空 <small>むな</small> しく <small>へん</small> に <small>しやう</small> 乗 <small>する</small> 策 <small>さく</small> を <small>こころ</small> 試 <small>みる</small> ら <small>る</small> |
| 10 | 寧留相漢身 | 寧 <small>いず</small> くん <small>ぞ</small> 漢 <small>かん</small> に <small>しやう</small> 相 <small>た</small> る <small>身</small> を <small>とど</small> め <small>ん</small> や |
| 11 | 淒涼舊部曲 | 淒涼 <small>せいりやう</small> 旧部 <small>きゆうぶ</small> 曲 <small>まげ</small> |
| 12 | 淚濕冢前麟 | 淚 <small>なみだ</small> は <small>うる</small> す 冢前 <small>ちやうぜん</small> の <small>りん</small> |

〔原注〕 公少知於范希文孫元規（公少くして范希文・孫元規に知らる）

○滕達道 滕元発（一〇二〇—九〇）のこと。達道はその字。東陽（浙江省）の人。知制誥、知諫院、御史中丞、知開封府などを歴任し、辺境を堅く守って名将と称された。『宋史』卷三三二に伝がある。その墓誌銘「故龍圖閣學士滕公の墓誌銘」（『蘇軾文集』卷一五。以下、「滕公の墓誌銘」と略す）は、張方平に代わって蘇軾が書いたものである。1○先帝一句 先帝は、神宗のこと。滕元発が重用される前に、英宗は彼の名を書して禁中に蔵していた。後を継いだ神宗はこれを知り、即位後すぐに滕を召して「治乱の道」を問うたという（滕公の墓誌銘、『宋史』滕元発傳）。2○虚懷一句 神宗と滕元発との間柄について、「滕公の墓誌銘」は以下のように記す。「帝の前に在りて事を論ずること、家人父子の如く、言に文飾無く、肝鬲を洞見す。帝其の誠をば尽くすを知り、事は鉅細と無く、人は親疎と無く、輒ち以て公に問う」。3○詩礼將 詩書礼樂を修めた將軍。『春秋左氏伝』僖公二十七年に、晉の文公が三軍を設け、元帥を誰にするかを謀った記事がある。このとき趙衰が卻穀を推薦して、「卻穀可なり。臣亟しば其の言を聞けり。礼・樂を説びて、詩・書に敦し。詩・書は義の府なり。礼・樂は徳の則なり。徳義は利の本なり……君其れ之を試みよ」と言い、卻穀が元帥（中軍の將）となった。4○武宣臣 漢の武帝と宣帝の代の朝臣。多くの名臣が出たとされる。班固「兩都の賦」の序（『文選』卷一）に、「武・宣の世に至りて、乃ち礼官を崇び文章を考う」とある。また、『漢書』公孫弘伝（公孫弘は武帝の世に登用）の論贊には、武帝が文武の人材を求めて、「漢の人を得るや、茲に於て盛んと為す」という時代を迎えたこと。これを承けて宣帝の世にも更に人材を集めて大業を修めたことが、数多くの名臣の名と共に述べられている。5○材大一句 「子由が「木山に水を引く」に和す 二首」その二の注（『蘇東坡詩集』第一冊五七五頁）を参照。6○信 伸びる。『周易』繫辭下伝に「尺蠖の屈するは、以て信びんことを求むるなり」とある。7○高平一句 高平は、山西省の地名。ここでは北宋の名臣范仲淹（九八九—一〇五二）を指す。范仲淹「太清宮九詠の序」（『范文正公集』卷六）に、「高平の范仲淹 序す」とある。風烈はりっぱな遺風。司馬相如「子虚の賦」（『文選』卷七）に、「楚地の有無を問えるは、大國の風烈、先生の余論を聞かんことを願えばなり」とある。

滕元発は范仲淹の外孫で、師弟関係にもあった。「滕公の墓誌銘」に、「范希文は、皇考の舅なり。公を見て之を奇とし、教うるに文を以てす」(希文は范仲淹の字)とある。8〇威敏一句 威敏は、孫沔(九九六一—一〇六六)の諡。孫沔は字を元規といい、会稽(浙江省)の人で、礼部侍郎、枢密副使などを歴任した。また三たび知慶州となり、辺境をよく守った。滕元発が進士及第後に湖州通判となった際、知杭州の任に在った孫沔に会い、「名臣なり、後に当に賢将と為るべし」と言われ、要害を治め辺境を守る要略を授かった(「滕公の墓誌銘」。典刑は、本物ではないが、元の姿を彷彿とさせるもの。「呂穆仲寺丞に寄す」詩の注(『蘇東坡詩集』第三冊五六四頁)を参照。9〇乘辺策 辺境を守るはかりごと。『史記』高祖本紀に、「関内の兵を興して、塞に乗せしむ」とあり、集解に李奇を引いて「乗は、守なり」という(『漢書』高帝紀上の顔師古の注によれば、乗は登る意)。10〇相漢 杜甫「韋左相に上る」二十韻一詩(『杜詩詳注』卷三)に、「韋賢 初めて漢に相たり、范叔、已に秦に歸る」とある。また、『漢書』韋賢伝に「本始八年、蔡義に代わりて丞相と為る」とある。11〇部曲 軍隊における編制単位。ここでは滕元発の老部下たちをいう。『漢書』李広伝に「出でて胡を撃つに及んで、広は行くに部曲・行陳無し」とあり、顔師古は『統漢書百官志』を引いて、大將軍のもとに五部(その長は校尉)があり、その下に曲(その長は軍候)が置かれるという。12〇冢前麟 墓前の麒麟の像。杜甫「曲江 二首」その一(『杜詩詳注』卷六)に、「江上の小堂に翡翠巢く、苑辺の高塚に麒麟臥す」とある。〔原注〕〇7句と8句の注を参照。

先帝はつとにあなたという人物をよくご存じだった、心を虚しくしてその意見をお聞きになるということでは、あなたの右に出る者はいなかった。今に至るまで、あなたの如き詩書礼楽をおさめた名將は、武帝・宣帝の盛世の臣下に認められるだけだ。

材の大いなるものはいいられがたいものだが、時が来れば少しは活躍の場を得ることもある。あなたのすぐれた風格は高平の范文正公さながらで、また在りし日の孫威敏公の人格を目の当たりにするようでもある。

なのにただ辺境の防備に使われるばかりで、一国の宰相となるべき身を(朝に)留めおかなかったことが惜

しまれる。あなたが嘗て率いてきた老部下たちは哀しみに泣き、墓前の麒麟像がその涙でぬれています。

一八八六

その二

- | | | |
|----|-------|-------------|
| 1 | 雲夢連江雨 | 雲夢 江に連なる雨 |
| 2 | 樊山落木秋 | 樊山 落木の秋 |
| 3 | 公方占賈鵬 | 公方 方に賈鵬を占い |
| 4 | 我正買龔牛 | 我れ正に龔牛を買う |
| 5 | 共有江湖樂 | 共に江湖の樂しみ有るも |
| 6 | 俱懷畎畝憂 | 俱に畎畝の憂いを懐く |
| 7 | 荆溪欲歸老 | 荆溪 帰老せんと欲して |
| 8 | 浮玉偶同遊 | 浮玉 偶たま同に遊ぶ |
| 9 | 骯髒儀刑在 | 骯髒 儀刑在り |
| 10 | 驚呼歲月遒 | 驚呼す 歲月の遒るを |
| 11 | 回頭雜歌哭 | 頭を回らせば歌哭を雜う |
| 12 | 挽語不成諷 | 挽語 諷を成さず |

1 2 ○雲夢・樊山二句 雲夢は、雲夢の沢のこと。洞庭湖の北一帯にあった広大な沼沢地。「呂梁の仲屯田に次韻す」詩の注『蘇東坡詩集』第四冊三四一頁を参照。樊山は、鄂州（湖北省）の山名『太平寰宇記』卷一一二、鄂州武昌縣。

蘇軾に、黄州謫居時に書いた「樊山を記す」(『蘇軾文集』卷七一)がある。この二句について王文誥は、安州に流されていた滕元発が都に赴く途中、黄州に在る蘇軾と会う約束をして果たせなかった頃のことと考証する。蘇軾から滕元発への書簡「滕元発に与う 六十八首」その十八、その二十六(『蘇軾文集』卷五一)を参照。3〇占買鵬 鵬はフクロウ、ミミズクの類で、不吉な鳥とされた。漢の賈誼が長沙に流されたとき、自室に鵬鳥が入ってきたので、自らの運命を嘆いて「鵬鳥の賦」(『文選』卷二三)を作った。「秋懷 二首」その一の注(『蘇東坡詩集』第二冊三六〇頁)を参照。4〇買龔牛 渤海太守となった漢の龔遂が、刀剣を帯びた農民たちに対して、刀剣を売って牛や犢を買わせた故事(『漢書』龔遂伝)をふまえる。「山村五絶」その二の注(『蘇東坡詩集』第二冊五〇七頁)を参照。5〇江湖楽 韓愈「孟東野に与うる書」(『韓昌黎集』卷一五)に、「今年の秋に到って、聊か復た辞し去らん。江湖は余が楽しみなり。足下と終えなば、幸いなり」とある。6〇畎畝 田畑の用水路とあぜ。延いて、農民、民間の意。『漢書』劉向伝に、「念うに忠臣は畎畝に在りと雖も、猶お君を忘れざるは、惓惓の義なり」とある。78〇荆溪・浮玉 荆溪は、浙江省常州を流れる川の名(『太平寰宇記』卷九二、常州宜興県)。浮玉は、金山(江蘇省鎮江)の異称。「常・潤の道中、錢塘を懐う有りて、述古に寄す 五首」その三の注(『蘇東坡詩集』第三冊二八六頁)を参照。元豊七年(一〇八四)八月、蘇軾は滕元発らと金山に遊び、「滕元発・許仲塗・秦少游に次韻す」(『合注』卷二四)を詠じた。このとき二人の間には、常州宜興県に土地を得て住まおうという話があったと考えられる。二句はそのことを詠じたものである。『蘇軾年譜』中冊六四五頁、および蘇軾の書簡「滕元発に与う 六十八首」その四十四、四十五、四十六(『蘇軾文集』卷五一)を参照。9〇骭髀 剛直で屈しないさま。李白「魯郡の堯の祠にて張十四の河北に遊ぶを送る」詩(『李太白全集』卷一七)に、「張公子の如き有り、骭髀として風塵に在り」とある。〇儀刑 のり。模範。また、のりとす。『詩經』大雅(文王の什)「文王」に、「文王に儀刑して、万邦乎を作さん」とある。11〇雜歌哭 歌うことと哭することとは、同事に成立しないものだが、それが激情でこちゃまぜになることをいう。『論語』述而篇に、「子 是の日に於て哭すれば、則ち歌わず」とある。また、『周礼』春官「女巫」に、「凡そ邦の大災は、歌哭して請う」とあり、鄭玄の注に「歌う者有り、哭する者有るは、悲哀を以て神靈を感ぜしめんことを冀うなり」とある。万里集九は、歌の

字は滕元発と金山に遊んだときのことを、哭の字は元発を喪った今のことをいうとする（『四河入海』卷二四の三）。

あなたが長江をおおって雲夢の沢に降りしきる雨に濡れていたころ、私は草木の黄落する樊山の秋のただなかにあった。鵬鳥に不祥を見た賈誼のように、あなたが自らの運命を占っておられたときに、ちょうど私は龔遂の勧めにならない、牛を買って耕作を始めていた。いずれも江湖に暮らす楽しみを持ちながら、田野に在っても天下を憂える心を抱いていたのだ。

いずれは荆溪の地に帰休しようと話し合ったのは、かつてたまたま金山に共に遊んだおりのこと。あのと権勢に阿らぬ立派な風格を仰ぎ見て以来、瞬く間に時が過ぎ去ってしまったことであつと驚く。

いま二人の交遊を振り返ると、よろこびと悲しみが激しく交錯して、あなたを弔う歌がまるで歌のかたちを成しません。

（担当 西岡 淳）

一八八七（施三二一七）

次韻蘇伯固游蜀岡送李孝博奉使嶺表

蘇伯固が蜀岡に遊んで李孝博が使を嶺表に奉ずるを送るに次韻す

1 新苗未沒鶴

2 老葉方翳蟬

3 綠渠浸麻水

4 白板燒松煙

新苗 未だ鶴を没せず

老葉 方に蟬を翳う

綠渠 麻を浸す水

白板 松を焼く煙

- 5 笑窺有紅頰
 6 醉臥皆華顛
 7 家家機杼鳴
 8 樹樹梨棗懸
 9 野無佩犢子
 10 府有騎鶴仙
 11 觀風嶠南使
 12 出相山東賢
 13 渡江弔很石
 14 過嶺酌貪泉
 15 與君步徙倚
 16 望彼修連娟
 17 願及南枝謝
 18 早隨北雁翩
 19 歸來春酒熟
 20 共看山櫻然
- 笑わらつて窺うかがうは紅こう頰きょう有あり
 醉よつて臥ががするは皆みなな華か顛てん
 家いえ家いえに機き・杼しよ鳴なり
 樹き樹きに梨り・棗そう懸かかる
 野やに犢こうしを佩おぶる子し無なく
 府ふに鶴つるに騎のる仙せん有あり
 風ふうを観みる 嶠きやう南なんの使し
 相しやうをい出いだす 山さん東とうの賢けん
 江かうを渡わたつて很こん石せきを弔しむい
 嶺みねに過よつて貪たん泉せんを酌くまん
 君きみと歩ほして徙し倚いし
 彼かの修しゆうとして連れん娟けんたるを望のぞむ
 願ねがわくは南なん枝しの謝しゃするに及およんで
 早はやく北ほく雁がんの翩ひらるに随したがえ
 歸かえり来きたらば春しゆん酒しゆ熟じゆくせん
 共ともに山さん桜おうの然もゆるを看みん

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○蘇伯固 蘇堅のこと。伯固はその字。『蘇軾詩注解（八）』に収める作品番号一六九六の詩の詩題の注を参照。なお、

蘇伯固のもの詩は伝わらない。○蜀岡 揚州の北にあるおか。『方輿勝覽』卷四四「揚州」の条に、「旧くより地脈は蜀に通ずと伝う。或るひと、蜀崗産の茶、味は蒙頂の如しと曰う。故に蜀崗と曰う」とある。○李孝博 字は叔升。徐積『節孝集』卷八に「李守孝博を送る」詩の序があり、「山陽太守李公、治行を以て高第し、即ち広東提点刑獄を拜す」とある。詩題にいう「使を嶺表に奉ず」とは広東提点刑獄を拜命して赴任することを指している。○嶺表 五嶺（湖南省の衡山から東の方、海に至るまでの山系で大庾嶺など五つの嶺をいう）の南側の地域。広東、広西一带をいう。○この詩は二句毎にすべて対句を配して作られている。

1○新苗一句 植えたばかりの稲の苗がまだまだ鶴の姿を隠すほど伸びてはいないさまをいう。韓愈「號州劉給事使君の「三堂新題二十一詠に和し奉る」その十三の「稻畦」(『韓昌黎集』卷九)に、「魚肥えて已に秀でたるを知り、鶴没して初めて深きを覚ゆ」とある。「趙郎中が蝗を捕えて寄せらるるに和して次韻す」詩の注(『蘇東坡詩集』第四冊九一頁)を参照。2○老葉一句 大きく茂った葉が蟬を蔽い隠すさまをいう。傅玄「蟬の賦」(『漢魏六朝百三家集』卷三九)に、「密葉の重陰に翳われ、閑樹の肅清なるに誤ぐ」とある。また『晉書』顧愷之伝に、「桓玄 嘗て一柳葉を以て之に給いて曰く、「此れ蟬の翳るる所の葉なり、取りて以て自ら蔽えば、人 己を見ず」と」とある。3○緑渠 あおく美しい溪流。張九齡「南山下の旧居に閑放す」詩(『曲江張先生文集』卷三)に、「喬木 青靄を凌ぎ、修篁 緑渠に媚し」とある。○浸麻 麻紙をつくる過程で麻を水に浸すこと。蘇軾は「六合の麻紙に書す」(『蘇軾文集』卷七〇)で、「成都の浣花溪は水の清浄なること常に勝り、麻楮を漚して以て紙を作る。緊白にして愛す可し。……揚州に蜀岡有り。岡上に大明寺の井有り。味を知る者以て蜀の水に相似たりと謂う。西して六合に至る。岡尽きて水発し、合して大溪と為る。溪の左右の居人も亦た紙を造る。蜀産と甚だしくは相遠からず」と述べて蜀岡産の紙の質を評価している。4○白板 白木のままの門扉。王維「田家」詩(『王右丞集』卷二)に、「雀は青苔の井に乳て、鶏は白板の扉に鳴く」とある。また白居易「渭村に退居して礼部の崔侍郎、翰林の銭舎人に寄する詩 一百韻」(『白居易集箋校』卷一五)に、「昼扉 白板を扇し、夜碓 黄粱を搗く」とある。○焼松煙 墨を造る煤をとるために松を焼く煙。蘇軾は海南島で自ら墨を造ったおりに、「海南墨に書す」(『蘇軾文集』卷七〇)に、「海南に松多く、松多

きが故に煤富み、煤富むが故に扱ふこと有るなり」と記している。5○紅頰 若い女性をいう。李白「王昭君 二首」その二(『李太白全集』巻四)に、「昭君 玉鞍を払い、馬に上って紅頰啼く」とある。また韓愈「晚秋、鄜城夜会聯句」(『韓昌黎集』巻八)に、「青娥 長袖を翳し、紅頰 鳴籥を吹く」とある。蘇軾は「塩官にて役を部し、戯れに同事に呈し、兼ねて述古に寄す」詩(『蘇東坡詩集』第二冊三九二頁)でも、「夜来 履み破りて 裘 縫を穿つ、紅頰曲眉 応に夢に入るべし」と詠じている。6○華顛 しがあたまの老人のこと。『後漢書』崔駰伝に、「包胥は单辞もて楚を存し、唐且は華顛にして以て秦を悟らしむ」とある。蘇軾は「莫同年と湖上に飲す」詩(『蘇軾詩注解』(三))でも、「到る処 相逢う 是れ偶然、夢中 相對して各おの華顛」と詠じている。7○機杼 機ははた。杼はひ、横糸を通す道具。「古詩十九首」その十「迢迢たる牽牛星」(『文選』巻二九)に、「織織として素手を擢ぎ、札札として機杼を弄す」とある。また李白「范金郷に贈る 二首」その二(『李太白全集』巻九)に、「百里 鷄犬静かに、千廬 機杼鳴る」とある。8○梨棗 なしとなつめ。杜甫「百憂集行」(『杜詩詳注』巻一〇)に、「庭前 八月 梨棗熟し、一日 樹に上ること能く千迴す」とある。9○佩犢 子牛を身につける、すなわち農業に従事することをいう。漢の龔遂は渤海の太守であつたとき、民の所持する刀剣を売らせ、牛を買わせた(『漢書』龔遂伝)。「山村 五絶」その二(『蘇東坡詩集』第二冊五〇七頁)の注も参照。10○騎鶴 殷芸の『小説』にみえる、大金を身につけて鶴に騎り、揚州に上りたいと言つた男の話を踏まえて、蘇軾自らを仙人になぞらえる。『蘇軾詩注解』(二二)に収める作品番号一八五八の詩の注を参照。11 12○觀風・出相二句 二句は李孝博が広東提点刑獄として赴任することになって、山東の賢人が世に出たことをいう。○觀風 『礼記』王制に「太師に命じて詩を陳ね、以て民の風を觀る」とある。○嶺南 嶺南、嶺表に同じ。『後漢書』馬援伝に、「(馬) 援 樓船二千余艘、戰士二万余人を將いて、……斬獲すること五千余人、嶺南悉く平らぐ」とある。○出相 王注に引く趙次公注に、「李孝博は山東人なり。而も又た相家の子なり」とある。『漢書』趙充国伝に、「賛に曰く、秦漢已来、山東は相を出だし、山西は将を出だす、と」とある。13○很石 鎮江の甘露寺にある石。「甘露寺」詩(『蘇東坡詩集』第二冊一二二頁)でも、「很石 庭下に臥し、穹窿 伏蹯の如し」と詠じている。その注も参照。14○貪泉 広州城外にある泉。『世説新語』德行篇にみえる呉隱之が母の死を痛切に嘆

き悲しむ話の劉孝標注に『晉安帝紀』を引いて、「吳）隱之 既に至性有り、加うるに廉潔を以てし、奉祿は九族に頒かち、冬月も被無し。桓玄 嶺南の敵を革めんと欲して、以て広州刺史と為す。州を去ること二十里にして食泉有り。世に伝うるに、之を飲む者は其の心に厭くこと無し、と。隱之 乃ち水上に至り、酌みて之を飲む」とある。15
 ○徙倚 さまようこと、たちもとおること。『楚辭』の「遠遊」に、「歩して徙倚として遙かに思い、悵として愴怳として懐いに乖く」とある。蘇軾は「餘杭の法喜寺の寺後の緑野亭に宿して、吳興の諸山を望んで孫莘老学士を懷う」詩（『蘇東坡詩集』第三冊二七三頁）でも、「徙倚す 秋原の上、淒涼たり 晩照の中」と詠じている。その注も参照。
 16○修連娟 女性の長い眉が細く曲がっているさま。司馬相如「上林の賦」（『文選』卷八）に、「長眉は連娟として、微睇は綿藐たり」とあり、郭璞の注に「連娟は曲がって細きを言うなり」とある。蘇軾はこれを山の美しさに用いている。『蘇軾詩注解（一）』に収める作品番号一五九〇の詩の注も参照。17○南枝 南に向いた枝。ここでは江西と広東の境にある大庾嶺の梅についていう。蘇軾は「虔州八境の図 八首」その三で、「故人 心に千山の外に在るべし、梅花の遠信を寄せて来たらず」と詠じていて、合注に引く師注に「大庾嶺の梅は南枝落りて北枝開く。寒暖の候 異なる故なり。嶺は虔の西南に在り」とある。『蘇東坡詩集』第四冊四三九頁も参照。18○北雁 春になって北に帰る雁。『礼記』月令に、「季冬の月、……雁 北に郷かう」とある。李白「南のかた夜郎に流されて内に寄す」詩（『李太白全集』卷二五）に、「北雁 春に帰って 看みす尽さんと欲し、南に來たれば豫章の書を得ず」とある。蘇軾は「莘老 天慶觀を葺く。小園に亭有り……」詩（『蘇東坡詩集』第三冊四四三頁）でも、「春風動かんと欲して北風微なり、帰雁亭辺 雁の帰るを送る」と詠じている。その注も参照。19○春酒 冬に醸して春に熟する酒。『詩経』豳風「七月」に、「十月稲を穫り、此の春酒を為り、以て眉寿を介く」とあり、毛伝に「春酒は凍醪なり」といい、孔穎達の疏に「此の酒は凍時に之を醸す、故に凍醪と称す」という。白居易「蓋微正に開き、春酒初めて熟す。因って劉十九・張大夫・崔二十四を招いて同に飲む」詩（『白居易集箋校』卷一七）に、「饗頭の竹葉 春を経て熟し、階底の蓋微 夏に入りて開く」とある。20○山桜 沈約「早に定山を発す」詩（『文選』卷二七）に、「野菜 開いて未だ落ちず、山桜 発して然えんと欲す」とある。

植えられて間もない稲の苗は鶴を隠すほどにはまだ伸びていませんが、大きく広がった木の葉は鳴いている蟬の姿を翳おほっています。あおく美しい溪流には紙を造る麻を浸してあり、白木の扉は墨を造る松を燻す煙で汚れています。

笑いさざめいてこちらを窺っているのは村の娘たち、酔っぱらって寝ているのはみんな白髪しろがの老人たち。家々からは機織はたりの音が聞こえ、樹々には梨や棗の実がぶらさがっています。

この揚州の田野には刀を売り払って牛を買わせねばならぬ民はなく、役所には鶴にまたがってやってきた仙人がおります。(孝博どのには) 広東にて民情を視察するお役目に就かれましたが、宰相を生むといわれる山東のご出身だけのことはあります。

長江を渡れば很石こんせきを訪ねられ、大庾嶺を越えれば貪泉たんせんの水を味わってください。いまあなたをお送りがてらぶらぶらと歩いてきて、はるか南方のたおやかな山々を望んでいます。

かなうことなら大庾嶺の南側の梅の花が萎れるころ、北に帰る雁とともにお帰りなさい。その時分には春の酒も熟しておりますよ、山の桜の燃えるように咲くさまとともに眺めようではありませんか。

(担当 中 裕史)

一八八九(施三二一八)

石塔寺并引

石塔寺せきとうじ 并ならびに引いん

世傳、王播飯後鐘詩、蓋揚州石塔寺事也、相傳如此、戲作此詩、

世よ伝う、王播が「飯後の鐘」の詩は、蓋し揚州の石塔寺の事なり」と。相伝うること此くの如し、戯れに此の詩を作る

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○石塔寺 揚州に在った寺、王播の故事を引く『唐詩紀事』卷四五、『詩話総龜』前集卷二四には、恵昭寺木蘭院と記されている。○王播 字は明敏。揚州の人。貞元の末（八〇五）に進士に及第し、のち工部郎中、礼部尚書、刑部尚書などを歴任し、長慶（八二二—八二四）のとき淮南節度使となって再び揚州を訪れた。文宗の大和四年（八三〇）に七十二歳で卒す。『旧唐書』卷一六四と『新唐書』卷一六七に伝がある。○飯後鐘詩 王播は、貧しかったころ恵昭寺木蘭院に客となって食事を供されたが、これを厭う僧たちが食事を告げる鐘を食後に鳴らしたため、王播が来るとすでに食事が終わっていた。二十余年後、身を立てて節度使となって再びこの寺を訪れた王播は、「上堂 已に了わりて 各おの西東す、慙愧す 闍黎の飯後の鐘、二十年來 塵 面を撲つ、如今 始めて得たり 碧紗の籠」〔唐 摭言〕卷七〕の絶句を作った。『蘇軾詩注解（十二）』に収める作品番号一七八〇の詩の注を参照。

「王播の「飯後の鐘」の詩は、揚州の石塔寺のことであろう」と世に伝わる。そのように伝えられているので、遊び心でこの詩を作った。

- | | | |
|---|-------|-------------|
| 1 | 饑眼眩東西 | 饑眼 東西に眩み |
| 2 | 詩腸忘早晏 | 詩腸 早晏を忘る |
| 3 | 雖知燈是火 | 燈は是れ火と知ると雖も |
| 4 | 不悟鐘非飯 | 鐘の飯に非ざるを悟らず |
| 5 | 山僧異漂母 | 山僧は漂母に異なり |

- 6 但可供一莞
 7 何爲二十年
 8 記憶作此訕
 9 齋廚養若人
 10 無益祇貽患
 11 乃知飯後鐘
 12 闍黎蓋具眼

但た一いっかん莞きん供くす可べきのみ
 何なん爲す二十年にじゅうねん
 記き憶おく作な此こ訕せしりを作なす
 齋さい廚ちゆうに 若かき人くのひとを養やしなわば
 益えき無なくして 祇ただ患わづらいを貽のすのみ
 乃すなわち知しる 飯はん後ごの鐘しやう
 闍じや黎りは蓋けだし具ぐ眼がんなり

12 ○饑眼・詩腸二句 一韓智翹の聞書に「王播ハヒダルサニ、メボシノ花ガチリテ、西東ヲモ弁ゼザルゾ。故ニ詩ヲツクル腸モ、詩ヲ吟ジ得ズシテ、朝夕ヲモ忘(ルル)ゾ。上ノ句ニモ詩ノ字ヲ添(エ)テ見ヨゾ、下ノ句ニモ饑(ノ)字ヲ添(エ)テ見ヨゾ。サウデ心方面白ゾ」(『四河入海』卷五の三)とある。詩腸は詩を作り出す詩人の心をいう。孟郊「劉言史を哭す」詩(『孟東野詩集』卷一〇)に「詩人は孤峭を業とし、餓死するもの良に已に多し……精異なり劉言史 詩腸 珠河を傾く」とある。3 ○燈是火 燈火は火であるという、あたりまえのことをさす。『五燈会元』卷一八の「泗州用元禪師」の条に「早く燈は是れ火なることを知らば、飯の熟すること已に多時なりしならん」とある。5 ○漂母 洗濯女をいう。飢えていた自分を助けてくれた洗濯女に、「吾れ必ず以て重く母に報いること有らん」と言い、のちに実際に漂母に千金を賜ったという韓信の故事を踏まえている。韋昭の注に「水を以て絮を撃ちて漂ひたす為なす、故に漂母と曰う」とある(『史記』淮陰侯列伝)。6 ○莞 につこり笑うこと。『論語』陽貨篇に「夫子は莞爾かんじとして笑う」とある。9 10 ○齋廚・無益二句 『漢書』高帝紀上に「漢王は西に帰らんと欲す。張良・陳平諫めて曰く「……楚の兵罷れて食尽く。此れ天の之を亡ぼす時なり。其の幾あやうきに因つて遂に之を取らずんば、謂う所の「虎を養いて自ら患うれいを遺のこす」なり」ととある。12 ○闍黎一句 『景德伝燈録』卷一四に「師、僧に問う、「甚麼い処ずくにか宿る」と、云く、「山下に宿る」と。師曰く、「甚麼い処ずくにか飯を喫す」と、曰く、「山下に喫す」と。師曰く、「飯を將もち

て闍黎の与に喫せしめし底の人、還た眼を具せしや」と。僧 対うる無し」と、僧に飯を与えた人が眼力をもつことをいう。ここではそれを用いて、逆に王播に飯を与えなかった僧侶の眼力をほめている。

飢えた詩人の疲れた眼には東も西もなく、詩作もっぱらのころでは時のたつのもわかりはしまい。「燈火は火だ」という理の当然を知ってはいいても、「鐘の音が飯どきではない」ことに気づかなかつたのだ。

山寺の僧侶は（韓信が世話になった）洗濯ばあさんとは違うのだから、ただちょっと笑ってすませばよかったものを、どうしてまた二十年の歳月をへて、なおも覚えていてこんな恨みがましい詩を作ったのか。

お寺の庫裏にこんな余計ものを養いおくのは、何の益も無く禍根をのこすだけだ。それでわかった、飯の後に鐘をついた僧侶の眼力はたいしたものだった、と。

（担当 中 純子）

一八九〇（施三二一九）

送晁美叔發運右司年兄赴闕

晁美叔發運右司年兄が闕に赴くを送る

1 我年二十無朋儔

我れ年二十にして朋儔無く

2 當時四海一子由

當時 四海に一子由

3 君來扣門如有求

君來たつて門を扣いて求むる有るが如し

4 頽然鶴骨清而修

頽然たる鶴骨 清にして修なり

5 醉翁遣我從子遊

醉翁 我をして子に從つて遊ばしむ

- 6 翁如退之蹈軻丘
- 7 尚欲放子出一頭*
- 8 酒醒夢斷四十秋
- 9 病鶴不病骨愈叫
- 10 惟有我顔老可羞
- 11 醉翁賓客散九州
- 12 幾人白髮還相收
- 13 我如懷祖拙自謀
- 14 正作尙書已過優
- 15 君求會稽實良壽
- 16 往看萬壑爭交流**

翁は退之の軻・丘を蹈むが如し
 尚お子を放して一頭を出さしめんと欲す
 酒は醒め 夢は断ゆ 四十秋
 病鶴 病まず 骨愈いよ虬なり
 惟だ我が顔のみ老いて羞ず可き有り
 醉翁の賓客 九州に散ず
 幾人か白髮にして還た相収めらる
 我は懷祖が如く 自ら謀るに拙し
 正に尙書と作らば已に過ぎて優ならん
 君が会稽を求むるは実に良壽
 往いて看よ 万壑の争いて交も流るるを

〔原注〕嘉祐初、軻與子由寓興國浴室、美叔忽見訪、云、吾從歐陽公遊久矣。公令我來、與子定交、謂子必名世、老夫亦須放他出一頭地(嘉祐の初め、軻は子由と興國の浴室に寓す。美叔忽ち訪わる。云う、「吾は歐陽公に従つて遊ぶこと久し。公は我をして来たつて、子と交を定めしむ」と。謂う、「子は必ず世に名あらん、老夫亦た須く他を放して一頭地を出ださしむべし」と)

〔**〕美叔方乞越(美叔 方に越を乞う)

元祐七年(一〇九二)、五十七歳の作。

○晁美叔 晁端彦(一〇三五—九五)のこと、美叔はその字。清豊(河南省)の人。「西湖を懐いて晁美叔同年に寄す」

詩の注〔蘇東坡詩集〕第三冊五八二頁を参照。發運使は、官職名で、江淮地方から都への農産物等の運送をつかさどる。右司は、右司郎中の略称で、尚書省の六部の中の兵・刑・工部を所管する。『統資治通鑑長編』元祐五年五月壬申の条に、「晁端彦を江淮荆浙等路の發運使と為す」とある。年兄は、同年の科挙の及第者が互いに呼び合う呼称。特に年長者に対して用いる。この詩は句ごとに押韻している（下平十一尤の韻）。

1〇我年一句 蘇軾は景祐三年（一〇三六）の生まれで、孔凡礼『蘇軾年譜』上冊五九頁によれば、晁美叔との初対面は嘉祐二年（一〇五七）三月で、「二十（歳）」は概数。朋儔は、ともがら。『世說新語』品藻篇に「詣ると称するを得ず、政に之を朋と謂うを得るのみ」とあり、劉孝標の注に「謝・王 理に於て、相互に朋儔と為すなり」という。2〇當時一句 四海は、四方の海の内、すなわち天下をさす。『論語』顔淵篇に「四海の内は皆な兄弟なり」とある。子由は、蘇轍の字。嘉祐二年当時、故郷の四川を出たばかりの蘇軾には、弟以外に知友がなかったことをいう。4〇頎然一句 頎然は、丈が長いさま。『詩経』衛風「碩人」に「碩人 其れ頎たり、錦を衣て褻衣す」（褻は、ひとえ）とある。鶴骨は、つるのようにやせた骨格。唐・孟郊「石淙 十首」その五（『孟東野詩集』卷四）に「飄飄たる鶴骨の仙、鼈背の庭に飛動す」とある。清而修は、体つきがすらっとして高いさま。567〇醉翁・翁如・尚欲三句 醉翁は、歐陽修の号。「醉翁亭の記」（『歐陽文忠公文集』卷三九）で知られる。三句は原注にあるように、嘉祐二年、晁端彦が興国寺の浴室院に蘇軾を訪ね、蘇軾の才能に対する歐陽修の賛辞と期待の言葉（子は必ず世に名あらん。老夫亦た須く他を放して一頭地を出ださしむべし）を伝えたことをふまえる。このことは、蘇轍「亡兄子瞻端明の墓誌銘」（『欒城後集』卷二二）等にも見える。退之は、韓愈の字。軻は、孟子の名。丘は、孔子の名。韓愈「張籍に贈る一詩」（『韓昌黎集』卷五）に「我が身 丘・軻を蹈む、爵位 早く縮まぢわされず」とある。8〇四十秋 嘉祐二年（一〇五六）から元祐七年（一〇九二）までは三十六年で、四十秋（年）は概数。9〇病鶴一句 病鶴は、病んだ鶴。やせたさまをいう。白居易「新秋、病より起く」詩（『白居易集箋注』卷二〇）に「病み瘦せて 形は鶴の如く、愁え焦れて 鬢は蓬よもぎに似たり」とある。また、「病中、病鶴に對す」詩（『白居易集箋注』卷二〇）に「同病の病夫 病鶴を憐れむ、精神損なわず 翅翎傷る」とある。蚪は、みずち。『說文解字』に、「龍の子の角有る者なり」と

いう。一句は晁美叔が瘦せてはいるが元気なことをいう。10〇惟有一句 韓愈「侯参謀が河中の幕に赴くを送る」詩『韓昌黎集』巻四）に「我が齒 豁かつにして鄙いひしむ可べく、君が顔 老いて憎にくむ可べし」とある。11〇賓客 欧陽修の弟子たちをさす。〇九州 太古に中国全土を九つの州に分かったもので、中国全土を指す。13 14〇我如・正作二句 懷祖は、晉・王述の字。『晉書』王羲之の伝に、「時に驃騎將軍王述、少わかきより名譽有り、羲之と名を齊ひとしくす。而るに羲之甚だ之を軽んじ、是に由りて情好あわらず。述は先に會稽たけたりて、母の喪を以て郡境に居る。羲之は述に代わるも、止だ一たび弔するのみにして、遂に重ねて詣いたらず。述は角声を聞く毎に、羲之の当に己を候うなるべしと謂い、輒おもち洒掃そうして之を待つ。此の如くにして年を累ぬるも、羲之 竟ついにに顧みず。述 深く以て恨みと為す。述の揚州刺史た為るに及び、將に徴しに就かんとして、郡界を周行するも、羲之に過よらざ。発するに臨み、一別して去るのみ。是より先、羲之 常に賓友に謂いて曰く、「懷祖 正ま當に尚書と作る可べきのみ。老に投じては僕射を得可べし。更に會稽を求むるは、便すなわち邈ほ然たり」とある。ここには13句にいう王述の「拙」に該当する表現は見られないが、王述が王羲之との關係を改善できなかったことを、蘇軾は自らの人間關係になぞらえて「拙」としたのであろう。尚書は官職名。尚書省は中央三省の一つで、吏・戸・礼・兵・刑・工の六部より成り、各部の長官を尚書という。『統資治通鑑長編』元祐七年七月癸卯の条に「龍 凶閹學士蘇軾を兵部尚書・充鹵簿使と為す」とある。15 16〇君求・往看二句 會稽は地名。宋代、越州會稽郡の役所は今の紹興市（浙江省）にあった。良壽は、よいはかりごと。良策。唐・陳子昂「洛陽の主人に答う」詩（『全唐詩』巻八三）に「方に明天子に謁し、清宴 良壽を奉る」とある。「万壑争いて交ごも流る」は、會稽の山河の美しさをいう。『世說新語』言語篇に「顧長康 會稽よ從り還る。人 山川の美を問う。顧云う、「千巖 秀うを競い、万壑 流れを争う。草木其の上に蒙籠たるは、雲興り霞蔚たるが若し」とある。

わたしは、二十歳はのころ、友人がほとんどおらず、そのときは世の中で親しめるのはただ子由一人つきりだった。あなたが初めて訪ねてくれたときは何か期するところがあまりのようで、鶴の如くに細身で背が高く、とても気品があまりでした。

（あなたがおっしゃるには）「歐陽修先生から、わたしと付き合うようにと勧められました」。先生ご自身が孔子・孟子の跡を継いだ韓愈と同じ立場におられる身でありながら、君にはいっそう高いレベルに達してほしい、と願われたのです。それから四十年、酒も夢もすっかり醒めてしまいました。

あなたは（今も）相変わらず痩せてはいますが、いよいよ強韌におなりで、わたしの老けた顔が恥ずかしいかぎりです。歐陽修先生の弟子たちは今ひろくあちこちに散らばっており、老顔で集える人が何人いるのでしょうか。

わたしは王懷祖と同じく世渡りの拙い人間で、「(兵部) 尚書」なんていう官職はあまりにも身に余るもの。あなたが会稽の長官への赴任を求めるのは確かに賢明な選択です。——その地の川が乱れ流れる絶景をこそ、ご覧あれ。

(担当 蔡毅)

一八九一（施三二二〇）

王文玉挽詞

王文玉が挽詞

- | | | |
|---|---------|-----------------------|
| 1 | 才名誰似廣文寒 | さいめい たれ 誰か 広文が 寒に 似たる |
| 2 | 月斧雲斤琢肺肝 | げつぶ うんきん 雲斤 肺肝を 琢く |
| 3 | 玄晏一生都臥病 | げんあん いっしょう 都て 病に 臥す |
| 4 | 子雲三世不遷官 | しうん さんせい 官を 遷らず |

- 5 幽蘭空覺香風在 幽蘭 空しく覚ゆ 香風の在ることを
 6 宿草何曾淚葉乾 宿草 何ぞ曾て涙葉乾かん
 7 猶喜諸郎有曹志 猶 お喜ぶ 諸郎に曹志有ることを
 8 文章還復富波瀾 文章還た復た波瀾に富む

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○王文玉 伝未詳。

1 ○才名一句 広文は、唐の鄭虔のこと。鄭広文と呼ばれた。蘇軾「鄭戸曹を送る」詩（『蘇東坡詩集』第四冊四三〇頁）の注を参照。一句は、学才はあっても不遇で、席に敷く敷物も無いほどに貧しい（寒）とうたわれた鄭広文に、王文玉を擬えている。2 ○月斧雲斤 斧も斤も、おの。『文心雕龍』鎔裁篇に、修辭について説いて、「譬えば繩墨の審分し、斧斤の斲削するがごとし」とある。○琢肺肝 文章の彫琢に凝ること。韓愈「崔立之評事に贈る」詩（『韓昌黎集』卷四）に「君に勧む 韜養して徵招を待て、彫琢して肝腎を愁えしむるを用いず」とある。3 ○玄晏一句 玄晏は、晉の皇甫謐（字は士安）のこと。玄晏先生と号した。学識が博く、晉の武帝からしばしば出仕を請われたが、終生官に就かなかった。二十年近く風痺を患い、また、寒食散（道家が煉った五石散）の中毒に悩んだ（『晉書』皇甫謐伝）。一句は、王文玉の姿を皇甫謐に重ねて述べている。4 ○子雲一句 子雲は、漢の揚雄のこと。子雲はその字。前漢の成帝の時、「羽簞の賦」を奏して給事黃門郎に除せられたが、それ以降、哀帝、平帝と三代の間、官を徙ることがなかった（『漢書』揚雄伝）。一句は、王文玉の姿を揚雄に重ねて述べている。5 ○幽蘭一句 一句は、幽けき蘭とその香りに、才徳がありながら世に知られなかつた王文玉を擬え、亡くなった後もその徳が遺っていると詠じる。『四河入海』卷四の四に引く一韓智翊の聞書に「蘭ホド草ノ中ニ徳ノアルモノハナケレドモ、幽ニシテサノミ世ニ知ラルル事モナキゾ」とあり、また「蘭ハ死（レ）タレドモ、其（ノ）香ハ変（ゼ）ザルガ如（ク）ニ、此（ノ）人ハ、死（ス）ト雖ドモ其ノ徳ハノコリテ有（ル）ゾ」とある。6 ○宿草 もとの根から芽ぶく草（宿根草）。蘇軾「陸龍圖詠の挽詞」（『蘇

東坡詩集』第二冊九四頁）を参照。○涙葉乾 樹が枯れるほどに涙を流して、亡くなった親を悼むこと。晉の王裒が、司馬昭（後に晉の文帝と追尊される）に直言して斬罪となった父・王儀の墓の側に廬して、朝夕、墓を拜しては号泣したために、その涙を浴びた柏の樹が枯れたという故事がある（『晉書』孝友伝の王裒の伝）。孟郊「古薄命妾」（『孟東野詩集』卷一）に「青山に靡蕪^{せいご}有り、涙葉 長に乾かず」とある。7 ○猶喜一句 曹志（字は允恭^{いんきやう}）は、魏の曹植（字は子建^{しけん}）の子。末子にして曹植の後を継いだ。『三國志』魏書・陳思王曹植伝の裴松之の注に引く「曹志別伝」に、「学を好んで才行有り」とあり、晉の武帝と会見した際に一晚語り明かし、甚だ器量を認められたという。一句は、王玉が亡くなくても、その子に器量があることを、曹植の後嗣となった曹志に擬えて称えている。曹植は、曹操の第二子。施注など複数のテキストでは、曹植を曹志に作る。8 ○波瀾 文辞が変化に富んでいることをいう。杜甫「故の高蜀州が人日に寄せられしに追酬す 並びに序」（『杜詩詳注』卷三三）に「文章 曹植 波瀾闊く、服食 劉安 徳業尊し」とある。

才知の誉れ高く、それでいて、かの鄭広文の貧寒ぶりに並ぶのはどなたでしょうか、月の斧、雲のまさかりを振るって詩にどこまでも彫琢を凝らされました。玄晏先生皇甫謐は、多病のため、生涯出仕しませんでしたし、揚雄は、天子三代にわたって黄門郎のままできて昇任しませんでした。

幽蘭が枯れても香氣だけがそのまま漂うのと同様、あなたの遺徳は生前と変わりなく感じられ、墓辺の草が年を越して芽ぶいても、あなたを偲ぶ涙は乾く暇がありません。でもうれしいことに、ご子息の中に（曹植の子の）曹志のようにすぐれた方がおられて、その詩文はやはり変化に富んでおりますよ。

一八九三（施三二一二）

送芝上人遊廬山

芝上人が廬山に遊ぶを送る

- 1 二年閏三州
二年 三州を閏す
- 2 我老不自惜
我れ老いて自ら惜しまず
- 3 團團如磨牛
团团として磨牛の如く
- 4 步步踏陳迹
歩歩 陳迹を踏む
- 5 豈知世外人
豈に知らんや 世外の人の
- 6 長與魚鳥逸
長く魚鳥と逸なることを
- 7 老芝如雲月
老芝は雲月の如く
- 8 炯炯時一出
炯炯として時に一たび出づ
- 9 比年三見之
比年 三たび之を見る
- 10 常若有所適
常に適する所有るが若し
- 11 逝將走廬阜
逝きて將に廬阜に走らんとす
- 12 計關道逾密
計ること關にして道逾いよ密なり
- 13 吾生如寄耳
吾が生 寄するが如きのみ
- 14 出處誰能必
出處 誰か能く必せん
- 15 江南千萬峯
江南の千万峰
- 16 何處訪子室
何れの処にか子が室を訪わん

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○芝上人 僧曇秀。蘇軾「曇秀に過りて送る詩の後に書す」(『蘇軾文集』卷六八)に「僕 広陵に在りて詩を作り、曇秀に送って云わく、「老芝は雲月の如く、炯炯として時に一たび出づ」とある。○廬山 山の名。江西省にある名勝。蘇軾「西林の壁に題す」詩(『蘇東坡詩選』二〇九頁)の詩題の注を参照。

1〇二年閏三州 蘇軾は、元祐六年から七年にかけての二年間に、知杭州から知穎州へと遷り、さらに知揚州へ任を遷された。一句は、そのことを述べている。3〇团团如磨牛 团团は、同じところを円形にぐるぐる廻るさま。磨牛は、石臼を挽く牛。釈惠洪「彭子長僉判に次韻す 二首」その二(『石門文字禪』卷四)に「心は磨驢を旋らすが如く、日夜 团团として転ず」とある。4〇歩歩一句 陳迹は、以前の踏み跡。『莊子』天運篇に「夫れ六絳は、先王の陳迹なり」とある。5〇世外人 世俗の外の人。『晉書』許邁伝に「未だ嘗て日を弥ねて帰るを忘れ、相与に世外の交を為さずんばあらず」とある。6〇与魚鳥逸 世俗を離れて、水辺に遊び、魚や鳥と馴れ親しむこと。蘇軾「零泉に留別す」詩(『蘇東坡詩集』第四冊一五六頁)の注を参照。78〇老芝・炯炯二句 老芝は、芝上人のこと。雲月は、雲間の月。炯炯は、はっきりと光が見えるさま。蘇軾「十月十六日、見る所を記す」詩(『蘇東坡詩集』第二冊一四五頁)の注を参照。78句は、芝上人を、時折ちらりと姿を現してはまた姿を隠す、雲間の月に喩えている。『四河入海』卷四の四に引く一韓智翹の聞書に「此(ノ)人ハ雲マノ月ノ如(ク)ニアソコデモココデモ、自由ニアルカルルニ、チャツチャツト相逢(フ)ゾ」とある。9〇比年一句 比年は、毎年。一句は、1句で述べる「二年」の間に「三州」に知事として赴くことに、その地で芝上人と顔を合わせたと述べている。一韓智翹の聞書に「二年ノ中ニ、三州デドコデモ穎デモ杭デモ揚デモ、此(ノ)人ニ相逢(フ)ゾ」とある。10〇適 自適、自得のさま。11〇逝將走 いざ行こうとすること。芝上人が、世俗のしがらみをきっぱりと捨てて、求法の境地に入っ行って行こうとする決意を示している。蘇軾「陳海州が「乗槎亭」に次韻す」詩(『蘇東坡詩集』第三冊四〇八頁)の注を参照。○廬阜 廬山のこと。梁の劉孝綽「陸長史倕に酬う」詩(『文苑英華』卷二四〇)に「廬阜は高名を擅にし、岩岩として大清を凌ぐ」とある。一句は、芝上人が廬山へ向かうことを述べている。一韓智翹の聞書に「今此(ノ)揚州ヨリシテ廬山ニイカウト云ハルルガ、是ハ求法ノ為ゾ」とある。12〇計 計画。芝上人の発意。○闕 迂闊。おおざっぱなこと。瑞溪周鳳の説に「言(フ

ココロ)ハ、芝上人今廬山二赴(カント)欲(ス)、必ズシモ功用有(ラ)ザ(ル)則ンバ計(ル)コト迂闊ニ似(ル)。然レドモ行ク所以ニ其ノ道愈(イヨ)密ナリ」とある。13〇吾生一句 吾生は、私の人生。蘇軾の人生を指す。寄は、仮に身を寄せること。『蘇軾詩注解(七)』に収める作品番号一六八五の23句の注を参照。蘇軾は、しばしばその詩において、自らの人生、また人の生を「如寄」と詠じている。『詩人と造物』第一部二「蘇軾詩論稿」を参照。万里集九の説に「第二ノ句ヲ回照シテ述(ブル)ナリ」とある。また、一韓智翹の聞書に「言(フココロ)ハ、芝上人ノ居住定(マラ)ズシテ、ハカリテモナク、我モ居住定(マラ)ズシテ、諸方漂流シテ寄ノ如クナルゾ。出処トモニ定(マラ)ザルホドニ、ドコニ居トモ必定セヌゾ。14〇出処 身のふり方。出て仕えることと、退いて野に居ること。『周易』繫辞上に「君子の道、或いは出で或いは処る」とある。『晉書』王羲之伝に「悠悠たる者 足下の出処を以て政の隆替を觀るに足る」とある。

この二年の間に三つの州の知事を務めました、私はもう老いてしまって、(今さら)この身を惜しもうとは思いません。白を挽く牛さながらぐるぐると同じところを旋り、一步一步、以前の踏み跡を踏んで行くばかりです。

どうして知り得ましよう、俗世の外に心を遊ばせる老師が、長く魚や鳥と親しんで飽くことのなかった境地を。芝老師は雲間の月のようなお方で、時折きらりとお姿を現して光られます。

この二年のうちに三度お会いしましたが、いつも自適のご様子です。今、いざ(俗世を避けて)廬山の山中に入って行かんとされる、ご発意は思いつきのように見えますが、得道はますます奥深く堅いのでしょうか。

私はこの世に仮に身を寄せているだけのようなものですから、どう暮らすかを予め決められません。江南には千万の山々がありますが、どこにあなたのお住まいを訪ねればよいのやら。

(担当 原田直枝)